

タイジンコミュニケーションジョウキョウニオケル ワシャノフアントゲンゴテキヒョウシュツトノカン レンセイ

松成, めぐみ
九州大学大学院人間環境学府

針塚, 進
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/914>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 4, pp.287-294, 2003-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



対人コミュニケーション状況における話者の不安 と言語的表出との関連性

松成めぐみ¹⁾ 九州大学大学院人間環境学府
針塚 進 九州大学大学院人間環境学研究院

Relation between trait social anxiety and features of verbal expression in a social situation

Megumi Matsunari (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Susumu Harizuka (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study is to examine whether and how the height of social anxiety effects verbal expression. It is said that people with high social anxiety tend to avoid social situations because they have strong fear of being evaluated by others negatively and often feel terribly uncomfortable with others. In this study, subjects with high/low social anxiety have to explain two topics to a strange listener. Because subjects with high social anxiety are very sensitive to negative evaluations, it was expected that they show different verbal expression in quantity and quality, especially in act of revealing personal information to others, from with low social anxiety. We analyzed their verbal contents at the points of "variety and extent of emotional expression" and "to which part of self the expressed contents are related". Results suggest that the effect of social anxiety differ according to one's sex. We also examine how impression others have to subjects' verbal expression. As a result, subjects with high social anxiety were regarded as less familiar.

問 題

他者との関わりや他者の前での活動において、独特の不安や緊張感を感じることは、日常的に経験されることである。対人コミュニケーション状況における不安は“シャイネス”“コミュニケーション不安”“聴衆不安”“あがり”といったさまざまな視点から研究されている。それぞれ定義は異なるが、本研究においては“対人不安”(social anxiety)をそれらとも重なりをもつ“他者の前で表現・活動するときに経験する不安(想像上のものを含む)であり、他者からの評価にたいする懸念によって強く影響されるもの”と規定する。対人場面においてこのような不安を強く頻繁に感じ、対人場面を避けようとする個人特性を対人不安傾向 (social anxiousness) と呼ぶ。対人不安は人前での自分のコントロールが適切に行われないことへの情緒的反応であるとされ、社会適応とも密接な関連をもち、重要な現象である。菅原(1991)によれば、対人不安の体験は“恥の意識”(呈示を意図しない自己像が露呈することによるもの：自己呈示の結果を問題とする)と“コミュニケーション不安”(人前での自分に自信がもてないこと、対人場面における自己の役割の混乱によるもの：自己呈示の過程を問題とする)に分類されるとする。このように、他者から否

定的評価を受けることを意識しそれを恐れ、かつ人前での自己呈示におけるコントロールに自信が持てないことから、対人的なかかわりを回避する傾向が生じてくると考えられる。しかし、対人不安傾向の高い人(以下、高対人不安者と記す)のすべてが対人的なかかわりをまったく避けているわけではなく、さまざまな形で他者とかかわりをもちながら社会生活を送っており、他者の前で自己表現をする機会・必要性を持っている。不安を感じながらも表現やコミュニケーションすることが必要な場面におかれたときに高対人不安者がどのようにふるまうかをみていくことで、人前での表現に困難を特に感じている人の理解や、不安を感じながらも自己表現をおこない他者との関係を保っていく方法についての視点が得られると考えられる。そこで本研究では、被験者の言語的表現が彼らの対人不安傾向によってどのような特徴をもつのかを検討することを目的とする。

高対人不安者は、会話において深い自己開示を行わない傾向や、自分から話題提供をおこなわず、話す量が少なく、相手の話に対する反応が遅いなどの傾向が指摘されている。特性シャイネスの低い者は高い者よりも発話総量が多い傾向があること、面接者の直視量が多いときに被験者の発話回数が多いことなど、対人場面における不安と発話行動との関連を示すと思われる報告がある(飯塚, 1995等)。よって本研究では、発話の量的な側面についての検討をおこなう。

それとともに、上述のように自己呈示に自信がなく他

¹⁾ 本論文の作成にあたりご指導いただきました大野博之先生、調査や分析にご協力いただきました被験者のみなさんと協力者のみなさんに、深く感謝致します。

者からの評価懸念が強いとされる高対人不安者は、自己開示をおこないにくいことが予想される。そこで、言語表現の量的側面とともに“自分の感情をどの程度表明するか”“語られたエピソードが自己とどの程度・どのように関与するか”といった言語内容も検討の視点とする。

また、他者に与える印象について検討した研究では、高対人不安者は低対人不安者に比べて緊張している・消極的である・愛想が悪い等の評価をうける傾向がみられている (Pilkonis, 1977; Cheek & Buss, 1981 など)。Leary (1983) は対人不安が高いことに伴う行動として非親和性をあげており、対人不安を感じているときには会話において話す割合が少ない・反応するのに時間がかかる・沈黙するなど、言語行動の減少がみられるとする。さらに言語的・非言語的な面での非親和的行動の結果として孤独感を感じる人が多いとしている。他者からの否定的評価は、高対人不安者の不安や緊張感をさらに高め対人場面での表現を回避することにつながるといった悪循環の可能性が考えられ、彼らの言語行動と他者からの評価の関連性について検討することは重要である。そこで本研究では、被験者の言語表現から他者がどのような印象をうけるのかについても検討する。

目的

被験者の言語表現が対人不安傾向によって異なるのか、異なるとすればどのような特徴がみられるのかを検討する。また、被験者の言語表現によって他者が被験者に抱く印象が被験者の対人不安傾向によって異なるのかを検討する。

方法

対象者

個別の面接調査に参加したのは、男女大学生または短期大学生22名。個別調査に先立って、被験者が受講する講義に参加している男女大学生・短期大学生173名(男性64名, 女性109名)に対し、対人不安の感情的要素と行動的要素をとらえる Social Avoidance and Distress Scale (SADS) と、他者からの否定的評価懸念をとらえる Fear of Negative Evaluation (FNE) の両質問紙調査を施行。SADS と FNE の合計得点を対人不安傾向得点とし、対人不安傾向得点が上位25%の者を対人不安高群, 下位25%の者を対人不安低群とし、その中から本調査への協力を募った。面接調査に参加した被験者の内訳は、対人不安

Table 1
発話内容の評定基準

基準Ⅰ. 感情表明の仕方	
カテゴリー	話し方
1	非人称的な話し方, 他人事のように話す。
2	話し手の感情は直接表現されない。感情をほのめかす。
3	感情や個人的体験についての描写がみられる。ただし, その特定の出来事・状況に限った表現。
4	話し手の感情が中心的に語られる。しかし, 感情・内的体験同士を関連付けたり, そこから自己吟味したりすることはない。
5	話し手が自身の感情や内面について語り, 自分自身の問題に向かう。
基準Ⅱ. 話題と話し手との関与	
カテゴリー	内容
1	話し手との関与が薄いエピソード, または話し手を含んだ不特定多数に関連するエピソード
2	話し手自身の外的・行動的側面に関連した個人的エピソード
3	話し手自身の内面に関連したエピソード
4	話し手と他者との関係に関するエピソード
基準Ⅲ. 伴う感情の質	
カテゴリー	内容
1	不明, 表明されない, 中性的感情
2	肯定的感情
3	否定的感情
4	両価感情

Table 2
印象評定用質問紙の項目

性格特性名	項目
外向性	話し好き・無口な*・陽気な・外交的
情緒不安定性	悩みがち・不安になりやすい・心配性・気苦労の多い
経験への開放性	独創的な・進歩的・洞察力のある・想像力に富んだ
勤勉性	いい加減な*・ルーズな*・怠惰な*・計画性のある
協調性	温和な・寛大な・親切的な・協力的な

※*は逆転項目。評定者に提示した際は、項目をランダムに並べ替えたものを用いた。

安高群・低群各11名（男5名，女6名ずつ）である。被験者はいずれも質問紙調査時以外には筆者との面識がない。

手続き

計画 対人不安傾向（2水準；高，低）×性別（2水準；男，女）×話題（2水準；結婚，携帯電話）の3要因混合計画，話題が被験者内要因である。

材料 1. スピーチ課題 話題は結婚についてと携帯電話についての2種類。被験者は概ね1～2分の間，ある話題に関して説明し自分の意見を述べる。聞き手は筆者（女性）であり，うなずきなどを交え共感的な態度で話を聞くよう努めるが，条件間での統制を保つため，被験者への質問や意見の表明をさけるよう心がけた。各話題について話をした後，質問紙にその都度回答する。被験者が話をする様子は，本人の許可を得てビデオ録画された。話題の提示順序は被験者によってカウンターバランスされた。

2. 質問紙 面接調査における被験者の内的状態をとらえる目的で，質問紙への回答を求めた。使用した質問紙は状態不安尺度 STAI-S および話しにくさに関する質問紙（今回の研究のために筆者が作成）である。

データの収集

評価基準 被験者の話から逐語録を作成。高対人不安者の特徴としてコミュニケーション場面の回避や他者からの否定的評価への懸念があることより，対人不安の程度による被験者の言語表現の違いには，以下のような視点が考えられる。①表出量の違い；これは，発話時間，文節数といった指標でとらえられると考える。②表出内容の違い；表出内容の中でも，特に“話題と自己との関連性”や“感情の表明”に違いが見られると考える。池見他（1986）の体験過程スケールを参考に，Table 1に記載した基準を作成した。さらに，被験者の発話内容によって聞き手が被験者に対してどのような印象を受けるかを検討するために，性格語群による印象評定をおこなう。

評価手順 プロトコルの表出内容の分析にあたり，被験者の発話を語られているテーマごとに数ブロックに分類（例えば「携帯電話の長所についてのブロック」「問

題点についてのブロック」など）。各ブロックを評定の対象とし，Table 1の基準に従って①感情表明の仕方②話の内容と自己との関連③伴う感情の質の3点をそれぞれ評定した。評定は筆者および研究の仮説を知らない大学院生2名の合計3名で行い，不一致な項目については協議によって決定した。また，性格語による印象評定は，表出内容分析の評定者とは異なる2名の大学院生が話題ごとの被験者のプロトコルを読み Big 5（内田,2002;和田;1996等。質問項目はTable 2参照）の20項目に5段階の印象評定をおこない，後の分析には印象評定の平均値を用いた。

結果

発話量に関する分析

発話時間 被験者が各トピックについて話し始めてから話し終わるまでの時間を計り，秒に直したものを従属変数とした。対人不安×性別×話題の提示順序の分散分析の結果，順序の主効果のみがみられた（ $F(1,7)=11.52$, $p<.01$ ）。結婚の話題から始めた群のほうが発話時間が長かった。

文節数 被験者の発話を文節ごとに区切り，文節数を従属変数とした。3要因分散分析の結果，対人不安×性別の交互作用が有意であった（ $F(1,7)=5.15$, $p<.05$ ）。単純主効果検定の結果，対人不安低群において性別の主効果がみられ，女性のほうが文節数が多かった（Fig.1参照）。同一の話題に対しても，女性のほうが言語表現をより多く多彩におこなう傾向があるものと思われる。なお，後に述べる発話内容による分析からもこの解釈が支持されると考えられる。

発話内容に関する分析

以下の各変数を従属変数として，結婚・携帯電話の各話題ごとに対数線形の当てはめによる分析（Yumino, 1981によるLOG3を使用。以下同様）を行った。

発話にみられる感情表出の仕方 Table 1の基準1に従い，エピソードごとに感情表明の仕方を評定。カテゴリー1からカテゴリー5と進むに従って感情表明の程度が大きいと考える，被験者ごとに最高値（最も大きい数字

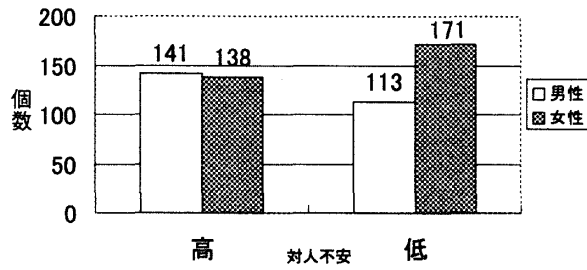


Fig. 1 文節数における対人不安×性別の交互作用

の 카테고리) と最頻値 (出現頻度が最も多い 카테고리) を代表値として従属変数とした。

1. 感情表明の仕方の最高値について、結婚の話題のときに男性における 카테고리 2 の表現が多く、同じく 카테고리 2 における女性の表現が少ない傾向にあった ($p < .10$)。分布からは、女性は直接自身の内面に関する

表明までおこなう人が多いのに対し、男性では気持ちを示唆する程度の表現にとどまる人が多かったことがわかる (Table 3 参照)。携帯電話の話題では統計的に意味のある効果はみられなかった。

2. 感情表明の最頻値について、結婚の話題において不安×性別の交互作用に有意差傾向がみられた。不安高群男性と不安低群女性では 카테고리 4 の表現が多く、不安低群男性と不安高群女性では 카테고리 4 の表現が少ないという傾向がみられた ($p < .10$; Table 3 参照)。また、結婚の話題においても携帯電話の話題においても、被験者の属性にかかわらず 카테고리 2 が多いという結果がみられた ($p < .10$; Table 4 および Table 5 参照)。

テーマの種類 Table 1 の基準 2 に従い、エピソードごとにメインテーマの種類を評定。最頻値 (出現頻度が最も多い 카테고리) を代表値として従属変数とした。

話題の自己関与度の最頻値について、結婚の話題のときに男性における 카테고리 3 (自分の内面について述

Table 3
感情表明の最高値の性別による差異

		感情表明の仕方の 카테고리				合計
		2	3	4	5	
性別	男	6 (1.72+)	1 (-1.25)	2 (-1.37)	1 (0.56)	10 (-0.07)
	女	1 (-1.72+)	4 (1.25)	7 (1.37)	0 (-0.56)	12 (0.07)
計		7 (0.46)	5 (0.09)	9 (1.59)	1 (-1.48)	22

表中の上段の数値は各 카테고리 に分類された被験者の人数であり、下段の () 内の数値は各主効果および交互作用についての標準効果の値である (+; $p < .10$)。

Table 4
感情表明の最頻値の対人不安・性別による差異 (結婚の話題)

対人不安		感情表明の仕方の 카테고리				合計
		2	3	4	5	
高	性別 男	2 (-1.25)	1 (-0.53)	2 (1.68+)	0 (-0.25)	5
	女	3 (1.25)	2 (0.53)	0 (-1.68+)	1 (0.25)	6
低	性別 男	5 (1.25)	0 (0.53)	0 (-1.68+)	0 (0.25)	5
	女	2 (-1.25)	0 (-0.53)	3 (1.68+)	1 (-0.25)	6
計		12 (2.76**)	3 (-0.69)	5 (-0.25)	2 (-0.94)	22

表中の上段の数値は各 카테고리 に分類された被験者の人数であり、下段の () 内の数値は各主効果および交互作用についての標準効果の値である (**; $P < .01$ +; $p < .10$)。

べる)の表現が多く、女性におけるカテゴリ3の表現が少ない傾向がみられた ($p<.10$)。分布からは、女性は自己の行動面について述べる人が多い者や他者との関係について述べる人が多い者など比較的各カテゴリにまたがって分布しているのに対し、男性は自己の内面を述べる人が多いというカテゴリに集中していることがわかる (Table 6 参照)。また、携帯電話の話題のときには、高不安男性と低不安女性のカテゴリ2が多く、

低不安男性と高不安女性のカテゴリ2が少ない傾向にあった ($p<.10$, Table 7 参照)。すなわち、高不安男性と低不安女性は、結婚の話題で感情を中心的に表明した者の割合が多く、携帯電話の話題では自己の外的側面や行動面について中心的に表明した者が多い。一方、高不安女性と低不安男性は、結婚の話題で感情を中心的に表明した者の割合が少なく、携帯電話の話題では自己の外的側面や行動面について中心的に表明した者が少ない。

Table 5
感情表明の最頻値の差異 (携帯電話の話題)

感情表明の仕方のカテゴリ					合 計
1	2	3	4	5	
6	10	5	1	0	22
(-1.09)	(2.99**)	(1.56)	(-0.65)	(-1.09)	

表中の上段の数値は各カテゴリに分類された被験者の人数であり、下段の()内の数値は各主効果および交互作用についての標準効果の値である (**; $P<.01$).

Table 6
テーマと自己との関与の性別による違い (結婚の話題)

		テーマと自己との関与のカテゴリ				合 計
		1	2	3	4	
性 別	男	1 (0.57)	0 (-0.573)	9 (1.70+)	0 (-1.15)	10
	女	1 (-0.57)	2 (0.57)	5 (-1.70+)	4 (1.15)	12
計		2 (-0.91)	2 (-0.91)	14 (3.35**)	4 (-0.39)	22

表中の上段の数値は各カテゴリに分類された被験者の人数であり、下段の()内の数値は各主効果および交互作用についての標準効果の値である (**; $P<.01$ +; $p<.10$).

Table 7
テーマと自己との関与の対人不安・性別による違い (携帯電話の話題)

対人不安		テーマと自己との関与のカテゴリ				合 計
		1	2	3	4	
高	性 別					
	男	1 (-0.84)	4 (1.76+)	0 (-0.63)	0 (-0.52)	5
	女	4 (0.84)	0 (-1.76+)	1 (0.63)	1 (0.52)	6
低	性 別					
	男	4 (0.84)	0 (-1.76+)	1 (0.63)	0 (0.52)	5
	女	4 (-0.84)	1 (1.76+)	1 (-0.63)	0 (-0.52)	6
計		13 (2.93**)	5 (-0.29)	3 (-0.31)	1 (-1.31)	22

表中の上段の数値は各カテゴリに分類された被験者の人数であり、下段の()内の数値は各主効果および交互作用についての標準効果の値である (**; $P<.01$ +; $p<.10$).

発話に伴う感情の質 Table 1の基準3に従い、エピソードごとにメインテーマの種類を評定。最頻カテゴリー（出現頻度が最も多いカテゴリー）を代表値として従属変数とした（なお、出現頻度が同数の場合は、基準1のカテゴリー、基準2のカテゴリーによる重み付けを行い、発話の感情表出度や自己関与度の数字であるときの情動カテゴリーを優先した）。3要因の対数線形分析をおこなったが、統計的に意味のある結果はみられなかった。

以上の結果からは、対人不安や性別といった要因はどのような種類の感情を表明するかとは関連がみられず、言語表現にみられる感情表出の仕方や自己関与度の程度には、対人不安と性別とが双方とも関連していることがわかる。全体的な性差としては、女性は外的・行動的側面や他者との関係など自己のさまざまな側面のエピソードを用いて語り、より直接的に感情表明するのに対し、男性は自己の内面が中心的テーマであるとの印象をうける語り方ながらも、直接的に感情表明することが少ないという傾向がみられた。

なじみのない他者の前で話をするという本研究の場面設定において、対人不安の高低による反応の仕方は、被験者の性によって異なっていた。男性では高対人不安者は結婚の話題で感情を中心に表明し携帯電話の話題で自己の外的・行動的側面について語った。女性では逆に、高対人不安者は結婚の話題で感情中心に話すことが少なく携帯電話の話題では自己の外的・行動的側面についての記述が少ない。男女いずれも、高対人不安者は各性の全体的傾向とは合致しない言語行動をおこなっている。

ここからは、以下のような可能性が示唆される。すなわち、男性における対人不安は、携帯電話といった比較的距離のとりやすい話題では自己と距離をとったような話し方をするが、結婚といった感情を喚起しやすい話題では感情が前面に出た話し方をするという、比較的話題の特性にひきずられた“言語面における自己開示の仕方のコントロール困難”としてあらわれている。一方、女性における対人不安は、感情を喚起しやすい話をする際に感情の直接的な表明を抑制するという“言語面における自己開示の抑制”としてあらわれている。

3. 発話による印象評定 発話による印象評定の各因子ごとの合計点の平均値を従属変数とし、対人不安×性別の分散分析をおこなった。（なお、3要因分散分析の結果、話題要因は主効果も交互作用もみられなかったために除外している。統計的検定にはSPSSver.8のGLMプロシジャを使用）

因子得点合計で性別の主効果が有意であり、女性のほうが高く評定されていた ($F(1,3)=11.5, p<.01$)。

外向性で性別の主効果が有意であり、女性のほうが高く評定されていた ($F(1,3)=16.64, p<.01$)。

情緒不安定性では統計的に有意な効果はみられなかつ

た。

経験への開放性では性別の主効果が有意傾向がみられ、女性のほうが高く評定されていた ($F(1,3)=4.0, p<.10$)。勤勉性では統計的に有意な効果はみられなかった。

協調性では性別の主効果が有意であり ($f(1,3)=12.64, p<.01$) 女性のほうが男性よりも高く評定されていた。また、不安の主効果に有意傾向がみられ ($F(1,3)=3.67, p<.10$)、低不安群のほうが高不安群よりも高く評定されていた。

以上の結果より、プロトコルからは女性被験者のほうが強い印象を与えていることがわかる。これは特に、女性の方が“外向性”“経験への開放性”“協調性”を高く感じさせたことによっている。協調性のみで対人不安の効果のみがみられ、対人不安の低い被験者のほうが“協調性”が高いと評定されていた。これは、対人不安の高い人は人との接触を避け他者からも同様の評価をうけるといって従来の報告と一致している。

考 察

本研究の目的は、被験者の言語表現が対人不安傾向によって異なるのか、異なるとすればどのような特徴がみられるのかを検討することであった。

被験者の発話内容の分析結果からは、話者の性別によって対人不安の高さは異なるあらわれ方をすることが示唆された。すなわち、男性ではより状況にひきずられた“自己呈示におけるコントロールの困難”として、女性では感情表明を抑制するという“自己呈示における抑制的コントロール（の過剰）”としてあらわれるものと思われた。今回はこれらの点についての被験者自身の内省報告をとっておらず結果からの解釈であるが、今後は直接“コントロール困難感”“コントロール過剰感”を話者が主観的に感じているかについて検討していけるような手続きが必要であろう。

高対人不安者がその性別によって異なる言語反応を示した理由としては、いくつかの可能性が考えられる。まず、他者に自らを言語的に表現していくときに、他者との関係や話題などの場面性にに応じて表出を調整していく能力において、女性の方が秀でていう可能性である。女性は男性と比較して一般に言語表現にすぐれており感情表現が豊かであるとされる。ここでみられたように、女性は単にたくさん話す・自分の感情をたくさん表出するというのではなく、基本的には発話量・感情表出の直接性が高いながらも、対人コミュニケーション場面における高対人不安者のように不安がたかまり評価懸念を感じたときには自己開示の程度を調整することができる（ときには過度の調整をおこなう）ものと考えられる。一方男性の高対人不安者は対人場面において不安が高まったときに、他者との関係（今回でいえば“なじみ

のない・年長の他者”)に依じて自己開示度を変え自己との関与度の低いエピソードを盛り込むなどの調整が困難であると思われる。一般的な言語能力の違いと、他者との関係によって表出を調整する能力の違いの双方がかかっているのではないだろうか。

もうひとつの可能性として、今回の聞き手は筆者(女性)であったため、女性は同性の聞き手に対して、男性は異性の聞き手に対して話すことになったという、場面の性質が挙げられる。対人不安は同性にたいするときよりも異性に対するときのほうが強く感じられるとの従来の知見があり、同一の聞き手のもつ意味が男女の被験者では異なっていたことも考えられる。

また、対人不安の違いによる言語表現への影響は、話題によって異なっていた。結婚の話題と携帯電話の話題は、自己開示のしやすさが異なる話題と想定し、課題として選択された。今回の被験者では、結婚の話題では感情表明で性差・性と対人不安の交互作用が、自己関与度で性差がみられた。いっぽう携帯電話の話題では、感情表明で性差が、自己関与で性と対人不安の交互作用がみられた。話題によって、対人不安が自己開示のどのような側面にあらわれるかが異なっていた。結婚の話題は比較的個人的なエピソードや感情を喚起しやすい課題であると考えられ、そのため調整を失いやすい男性高対人不安者が感情を中心的に述べ、世間一般の話や周辺的なエピソードを述べるという対処ができないという、話題にひきずられたとみえる反応を示したと思われる。

いっぽう携帯電話の話題は一般的なエピソードを語りやすく、また感情喚起は比較のおこりにくく感情を表明せずに話をするのが比較的容易であると考えられる。分布からも、他者一般にかかわるようなエピソードを中心的に述べている者が多い。そのような場合にも、男性高対人不安者は外的・行動的側面を語るという、自己開示性は低いと考えられるが自己とは切り離していない語り方をすることが多く、比較的自己開示が抑えられやすい性質の課題でも、エピソードの種類を自己とかわりのない無難なものにするという方法をとっていない。一方女性では、見知らぬ他者という相手に対し一般的な他者の話をするなど、話題の性質の中でも自己開示を抑える方向に働きやすい部分を上手く利用して、自己関与度の調整をおこなっているものと思われた。

また本研究では、被験者の言語表現に対して他者が被験者に抱く印象が被験者の対人不安傾向によって異なるのかについても検討した。プロトコルからみた被験者の印象評定では、性差が強く見られ、評定者は女性のプロトコルからのほうがより様々な性格特性をより強く感じ取っていた。これは、女性がより直接的に自らの感情を表明していたことによるものと考えられる。また、自己とのかかわり方という点で幅広いトピックを用いて語っ

たことが、“創造性”得点の高さに影響した可能性がある。言語表現にあらわれた“感情表明の直接性”や“トピックと自己との関与”によって、他者が話し手のパーソナリティに対して抱く印象が影響をうけていることがわかった。一方、対人不安の高低による性格印象の違いは、“協調性”についてのみでみられた。Leary (1983)も述べているような、高対人不安者は親和性が低く人と一緒にいることをあまり好まないとの印象は、今回のような言語的な情報のみからでも他者に伝わるということが明らかになった。

今回評定したプロトコルの“感情表明の仕方”や“テーマと自己との関連性”では対人不安のみによる効果は観察されておらず、評定者に“協調性”の違いとしてとらえられた高対人不安者と低対人不安者の言語表現の違いがどこにあるのかについて述べるには、さらに検討する必要性が感じられる。例えば、発話量・発言内容や表明された感情の内容以外に、今回の研究では扱わなかった“語る際に聞き手を巻き込むような発言の程度”など、話す際にどの程度聞き手を巻き込もうとしているかに関した話し方のスタイルについても検討していくことで、言語表現の仕方と他者が抱く印象との関連性について検討することができると考えられる。また、今回の印象評定には影響を与えてはいないと考えられるが、被験者の非言語的な表現もあわせて検討していくことで、対人不安喚起状況での心理・行動についてより全体的にとらえることができるであろう。

文 献

- Cheek, J.M., & Buss, A.H. (1981) Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330-339.
- 池見陽・田村隆一・吉良安之・弓場七重・村山正治 (1986) 体験過程とその評定：EXP スケール評定マニュアル作成の試み 人間性心理学研究 **4**, 50-64.
- 飯塚雄一 (1995) 視線とシャイネスとの関連性について 心理学研究, **66**(4), 277-282
- 石川利江・佐々木和義・福井至 (1991) 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本版標準化の試み 行動療法研究 **18**(1), 10-17
- M・R・リアリィ 生和秀敏 (監訳) (1990) 対人不安 北大路書房
- (Leary, M.R. 1983 Understanding social anxiety. Beverly Hills: Sage.)
- Pilkonis, P.A. 1977 The behavioral consequence of shyness. *Journal of Personality*, **45**, 596-611.
- 菅原健介 対人不安の類型に関する研究 (1992) 社会心理学研究, **7**, No. 1, 19-28.

内田照久 音声の発話速度が話者の性格印象に与える影
響 (2002) 心理学研究, 73, No.2, 131-139
和田さゆり 性格特性語を用いた Big Five 尺度の作成

(2002) 心理学研究, 67, 61-67

W.Ray Crozier (2001) UNDERSTANDING SHYNESS
Psychological Perspectives. PALGRAVE